住井するとその文学の里（二十）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員　栗原（くりはら）　功（いさお）

住井も参加した無産婦人芸術連盟

―男女共同参画の先駆的運動―

昭和5年（1930年）1月に東京で、熊本県出身の元代用訓導（教員）の高群逸枝（たかむれいつえ）が中心になって『無産婦人芸術連盟』が結成された。同連盟は解放社から月刊雑誌『婦人戦線』を翌年の6月号まで刊行していて、住井は同雑誌に小説や評論を寄稿していた。

無産婦人芸術連盟には、平塚らいてう（本名明（めい））や市川房枝も加わっていた。

平塚らいてうは大正・昭和の社会運動家で、明治19年（1886年）に東京市麹町区（こうじまちく）（現千代田区）に高級官僚の三女として誕生。日本女子大学校を卒業して、同44年（1911年）に岡本かの子、神近市子らと『青鞜社（せいとうしゃ）』を結成。女性の文芸雑誌と称して機関誌『青鞜』を発刊、創刊の辞に『元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。…』の論文を発表し、これがのちに『日本初の女性解放宣言』と評価されて有名になった。

平塚らいてう・市川房枝らが女性の政治集会参加を実現

―憲政の神様尾崎行雄の支援で―

平塚は大正9年（1920年）に市川房枝らと『新婦人協会』を設立して、治安警察法第5条の『女子及未成年者は公衆を会同する政談集会に会同し若（も）しくは発起人たることを得ず』の撤廃請願運動を政府、議会に対して行った。尾崎行雄の支援があって2年後に同法第5条の『政治集会への女性の参加を認める』一部改正を実現させた。尾崎行雄は咢堂（がくどう）と号し、自由民権運動を経て、明治15年（1882年）に立憲改進党の結成に参加、同23年の第1回総選挙で衆議院議員に当選し、以来25回連続（昭和28年4月執行の総選挙で落選するまで63年間在職）当選。その間、第1次大隈内閣の文相、第2次大隈内閣の司法相を歴任した。一方、大正元年（1912年）12月に長州閥最高級官僚（陸軍大将）の桂太郎が第3次内閣を組閣すると、尾崎は常に衆議院に多数を擁する保守政党立憲政友会の院内総務の立場におかれていたが、立憲国民党領袖犬養毅らと提携のうえ『長州閥打破、憲政擁護』の論陣を張り、翌年の2月5日の衆議院本会議で桂内閣弾劾演説を行って同内閣を53日で総辞職に追い込み『憲政の神様』と称された。この年東京市長を兼務していた尾崎は米国ニューヨークに桜の苗木3000本を贈った。また戦時中の昭和17年（1942年）に尾崎は東条首相に公開状を送り翼賛（よくさん）選挙の中止を勧告した。

ところで、平塚らいてうと新婦人協会を設立した市川房枝は明治26年（1893年）に愛知県に生まれ、同県女子師範学校（現愛知教育大学）を卒業して尋常小学校訓導（教員）になった。大正7年（1918年）に上京、諸職を経て、平塚と新婦人協会を設立。…昭和15年（1940年）に結成した『婦選獲得同盟』を太平洋戦争開戦後の同17年に大日本婦人会（戦争協力団体）に加入させ、さらに大政翼賛会（たいせいよくさんかい）を中心とした翼賛体制（天皇の軍隊が遂行する戦争に天皇の臣下国民が協力するため組織化された）の翼下に入り、大日本言論報国会の理事にもなって少なからず戦争遂行に協力したとされた。敗戦直後の昭和20年8月25日に市川はいち早く立ち上がり、山高しげりらと共に『戦後対策婦人委員会』を組織して政府や各政党に婦人参政権を要求。同年11月3日には、戦後初の婦人団体『新日本婦人同盟』を結成して会長に就任し、12月17日に衆議院議員選挙法改正で『婦人参政権（男女普通選挙）』の実現を見てここに市川の悲願は達成された。翌21年1月4日に連合国軍最高司令官総司令部（略称GHQ）より公職追放指令、俗に言われるパージが発せられた。これはポツダム宣言の精神に基づいたもので、追放者は、戦争遂行責任者、国家主義団体幹部などの戦争協力者、大政翼賛会の市区町村支部長を兼任した首長、財界人、言論人で、21万人に及んだ。市川も言論人として戦争に協力した一員とされ公職追放の身となった。解除後市川は『理想選挙』を一大スローガンに掲げて、昭和28年・34年・40年・49年・55年執行の参議院選挙に当選（記録提供参議院事務局広報課）した。

若き日の住井は女性解放運動を通して市川と交際があった。明治、大正、昭和を生き抜き平成の世になって最晩年に住井は周囲に『高群逸枝らと始めた無産婦人芸術連盟による運動が今日の男女共同参画実現の端緒になった』と語っていた。